

平安京左京四条三坊四町跡・
烏丸綾小路遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一五―一五

平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京四條三坊四町跡・
烏丸綾小路遺跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、マンション建設に伴う平安京跡・烏丸綾小路遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

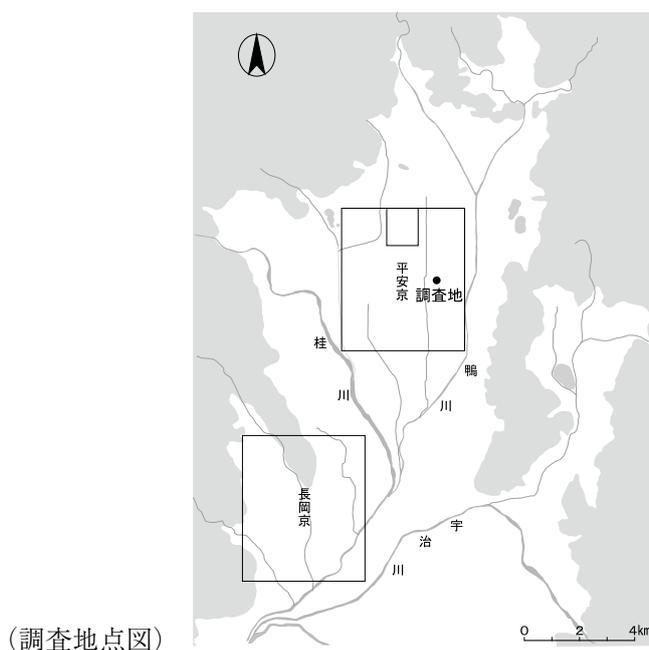
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成28年5月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・烏丸綾小路遺跡（文化財保護課番号 15 H 099）
- 2 調査所在地 京都市下京区郭巨山町11他
- 3 委 託 者 大阪ガス都市開発株式会社 代表取締役社長 高橋幸夫
新都市企画株式会社 代表取締役 北村勝哉
- 4 調査期間 2015年10月14日～2015年12月3日
- 5 調査面積 195㎡
- 6 調査担当者 東 洋一・布川豊治・中谷正和
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 東 洋一
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 歴史的環境と立地	2
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構の概要	5
(3) 遺 構	8
4. 遺 物	15
(1) 遺物の概要	15
(2) 土器類	15
(3) 瓦 類	19
(4) 石製品	20
(5) 金属製品	21
(6) 壁土・鋳型	21
5. ま と め	23

図 版 目 次

図版1	遺構	1	江戸時代全景（北から）
		2	平安時代末期から室町時代全景（北から）
図版2	遺構	1	井戸119（東から）
		2	井戸119半裁状況（東から）
		3	井戸119鹿角出土状況（南から）
		4	井戸40（南西から）
図版3	遺構	1	井戸77（北西から）
		2	井戸77猪骨出土状況（北から）
		3	井戸80（西から）
		4	井戸19（東から）
図版4	遺構	1	地下室109炭層検出状況（南から）
		2	地下室109石敷検出状況（南から）

図版5 遺物 井戸119・40・77・80・19・地下室109出土土器

図版6 遺物 地下室109・土坑83・92出土土器、石製品、金属製品

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（南西から）	2
図4	作業風景（北から）	2
図5	調査区東壁・南壁断面図（1：80）	6
図6	遺構平面図（1：100）	7
図7	井戸119実測図（1：50）	8
図8	土坑114、井戸40・77・80実測図（1：50）	9
図9	地下室109実測図（1：50）	10
図10	土坑21・88・90・91・98実測図（1：50）	11
図11	井戸19、土坑9・54・83実測図（1：50）	13
図12	井戸標高比較図（1：100）	14
図13	井戸119・40・77・80・19出土土器実測図（1：4）	16
図14	地下室109、土坑93ほか出土土器・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	18
図15	石製品実測図（1：4）	20
図16	金属製品実測図・銭貨拓影（1：2）	20
図17	壁土・鋳型実測図（1：3）	21
図18	町屋間口復元模式図（1：200）	23

表 目 次

表1	周辺の既往調査一覧表	3
表2	遺構概要表	5
表3	井戸比較一覧表	14
表4	遺物概要表	15

平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡

1. 調査経過

四条西洞院北東の四条通に面した宅地が再開発されることとなり、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導の下に公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。

10月14日に付帯工事、機材搬入、土置場の確保、調査区の縄張りなどを行い、翌日の15日に重機掘削を行い、調査を開始した。

重機による掘削では、近代以降の盛土・攪乱層を除去した。そこで検出した遺構面は現地表下0.3～0.5mで、大半は地山直上となっている。中世の堆積土層は部分的に残存していたのみである。以降は人力によって掘削した。検出した遺構は平安時代から桃山時代にかけての井戸・土坑・地下室・柱穴などである。12月3日に全ての調査を終了し、重機によって平坦に埋め戻した。また、調査は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。



図1 調査位置図 (1:2,500)

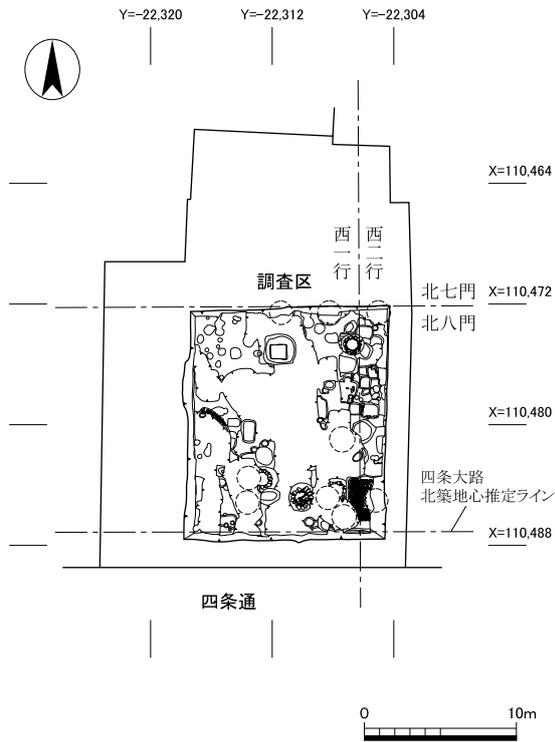


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景 (南西から)



図4 作業風景 (北から)

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地は鴨川右岸に形成された南方に舌状に伸びる自然堤防状の高まりに立地しており、かつてはその西側を西洞院川が南流していた。この高まりには、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である烏丸綾小路遺跡が分布しており、当地は遺跡の北西端部にあたる。

また、調査地は平安京左京四条三坊四町に該当し、東の町尻小路、西の西洞院大路に挟まれ、四条大路に南面する。調査区の南端はほぼ四条大路北築地心ライン、北端は北七・八門境にあたり、西一・二行の境が東部を通る。

文献史料によると、四町には関白藤原頼忠の邸宅が存在した。この邸宅には多くの皇后が居し、やがて里内裏となって御所は四条宮と呼ばれた。規模は方1町と推定されている¹⁾。四条宮は幾度かの火災に見舞われ再建を繰り返すが、承暦3年(1079)には焼亡した。その後、平安時代末期には四町の西半に右大臣源雅定の亭があったが、この亭も安元3年(1177)の京都大火で焼亡したとされる²⁾。

平安時代末期から中世には、商工業地帯として栄えた「四条町」が四条大路と町小路の交差点を

中心に広がっており、調査地はその西辺にあたる。ただ、当該地にあたる四条西洞院交差点付近には酒屋の分布が認められないことから、四条町の繁華街からは外れていた可能性がある⁴⁾。この点は、西洞院川に向かって急激に下がる地形的な制約のためと考えられる⁵⁾。

当地は室町時代には「革棚町」と呼ばれ、応仁・文明の乱以降、祇園会に山車を出した下京の古町として知られていた。これは、武具などに用いる皮革を取り扱う手工業生産者が集住していたことに由来するものと考えられる⁸⁾。なお、江戸時代の絵図などの史料でも幕末までは「革棚町」もしくは「川棚町」と記録されている。「革棚町」から現在の祇園会にちなんだ「郭巨山町」への正式な名称変更は明治時代以降のことである。

また、室町時代には「四条西洞院与町之間北類」と「四条町西洞院間北類」に六条八幡宮所領のあったことが近年の研究で明らかになっている。さらに、江戸時代中期には「四町」西側に肥前平戸松浦家の藩邸があったが、その後江戸時代後期には消滅しており、以降町屋となっている。

(2) 既往の調査 (図1、表1)

四町の南東角で実施した調査4では、平安時代の池跡を検出しており「四条宮」に関連した遺構と推測されている。また、中世の鑄造遺構や遺物、多数の土坑や地下室なども検出しており、これらは「四条町」に関連したものと推測されている。

また、調査地の西に位置する調査3では、平安時代から近世までの遺構・遺物を検出している。当地の現地表面は東側の敷地より低く、地山面も地表面よりおよそ-0.9mと比較的深い地点で検出されている。また、調査地北西の西洞院大路に面した調査2では、地表下1.3mで鎌倉時代から

表1 周辺の既往調査一覧表

No.	調査方法	条 坊	調査概要	文 献
1	発掘	四条二坊十三町	平安時代の土坑、柱穴を検出。鎌倉～室町時代の遺構の残存状況が良好で、鑄造遺構、園池、掘立柱跡、土坑、井戸、溝などの室町時代の遺構を多数検出。	『平安京左京四条二坊十三町発掘調査終了報告書』古代文化調査会 2000年
2	試掘	四条三坊四町	地表下1.3mにて鎌倉～室町時代の土坑。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成2年度』京都市文化市民局 1991年
3	試掘	四条三坊四町	地表下0.86mで地山。近世以降の井戸、中世の南北溝、鎌倉時代の土坑、平安時代の土坑、柱穴を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
4	発掘	四条三坊四町	平安時代中期～桃山時代の遺構・遺物を多く検出。特に平安時代の園池と中世鑄造関連の遺構・遺物を検出。	『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント 2007年
5	発掘	四条三坊五町	平安時代前期～桃山時代の溝、井戸、土坑、柱穴などを検出。越州窯系の毛彫青磁碗などが出土。	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
6	発掘	五条二坊十六町	弥生～江戸時代の遺構・遺物を確認。平安時代の雨落溝を検出。火を受けた瓦、土壁の他、弥生土器、輸入陶磁器などが出土。文献によると藤原資長邸があったとされる。	『平安京左京五条二坊十六町 京都文化博物館調査研究報告第6集』京都府文化博物館 1991年
7	試掘	五条二坊十六町	室町時代の井戸、土坑を検出。土師器、近世陶磁器などが出土。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年

室町時代の土坑を検出しており、西洞院大路に向かって地形が低くなり、各時期の堆積土が厚くなる傾向がみられる。これに対して上述の調査地区よりも西洞院川からわずかに東に離れた地点である当調査地は、地表下0.3～0.5mと浅いところで地山面を検出している。これらの調査成果からは、西洞院川へ向かって急激に下降する東岸域の状況が読み取れる。

註

- 1) 『京都市の地名』平凡社 1984年。また、『拾芥抄』には「四条宮」を四条通の南側を指す「四条南西洞院東」と述べた箇所が1箇所あるが、当時の条坊制呼称法からすれば「四条三坊四町」を該当地とすべきであろう。
- 2) 『中古京師内外地図』及び『京都坊目誌』
- 3) 小野晃嗣『日本産業発達史の研究』法政大学出版局 1981年。『庭訓往来』の記述によれば「四条五条の辻が商業繁栄の中心であったが、酒屋の密度に於いても四条・五条付近は最も濃密である」という。
- 4) 註3に同じ「洛中酒屋分布図」
- 5) 江戸時代、本居宣長が『在京日記』（『史料京都見聞記』収録）において、頻繁に洪水を起こす西洞院川について記しており、西洞院川周辺は低地で洪水の影響が多かったことが窺える。
- 6) 『御借米之記』元亀2年（1571）
- 7) 当初は「みち作山」とされているが、江戸時代以降は「郭巨山」に名称が変化している。
- 8) 康永2年（1343）の『不動院仙恵所領紛失状』には、四条町に「小物座・腰座・刀座」の他に武具の一種で主に鹿革を袴の上に着装する「行膝」（ムカバキもしくはカバキ）を製作販売した「行膝座」が記されている。また、室町時代前期のものとされる『藤原氏女家地券紛失状案』（『大徳寺文書』）には、革製品を生産販売するための「切革坐棚」が四条町巷所に存在したとある。さらに、同時期の文献である『神道集・卷第八・鏡宮事』には四条町に「鎧腹卷座始、弓矢・太刀・小刀・綾錦・馬鞍座見廻」との記述がある。なお、京都市編『史料京都の歴史12・下京区』（平凡社 1981年）によれば、宣教師ルイス・フロイスの『日本史』に永禄3年（1559）に宣教師ヴィレラが戦国時代の京都で二番目に布教拠点を得た場所として「町外れの、通常きわめて下層のもっとも賤しい人たちが住んでいる革ノ棚という一区」に該当する。
- 9) 『新撰増補京都大絵図』貞享3年（1686）、『京羽二重』貞享二年など。
- 10) 大村拓生「六条八幡宮領からみた室町期京都」『中世京都首都論』吉川弘文堂 2006年参照。
- 11) 『新撰増補京都大絵図』貞享3年（1686）・元禄4年（1691）などに、「松浦肥前六万三千石」との記載がある。

3. 遺 構

(1) 基本層序

基本層序は地表下0.3～0.5mで地山面となる。この間は現代盛土と江戸時代中期以降の土層からなっており、その大半は江戸時代中期以降の火災層を含む盛土や棧瓦が詰まった火災整理土坑で占められている。盛土には赤く変色した棧瓦の破片、焼けた壁土の他に砂の比率が高い水回り関連の分厚い淡黄褐色の漆喰（三和土）が多く混じっていることが特徴である。これらの江戸時代中期以降の火災層下が遺構面で、ほぼ地山である。中世の土層は地山面の上に部分的に残存しているが、暗灰色系の土層で、瓦片や焼土はほとんど含まれないのが特徴である。

いわゆる地山は北東から南西方に堆積する砂礫・砂・粘土層からなり、鴨川もしくは鴨川支流の堆積物と考えられる。これらの堆積物からは遺物を検出しておらず、遷都以前の鴨川の支流である西洞院川もしくは地勢に沿った南西方向に流れる河川の堆積跡と考えることができるであろう。

(2) 遺構の概要

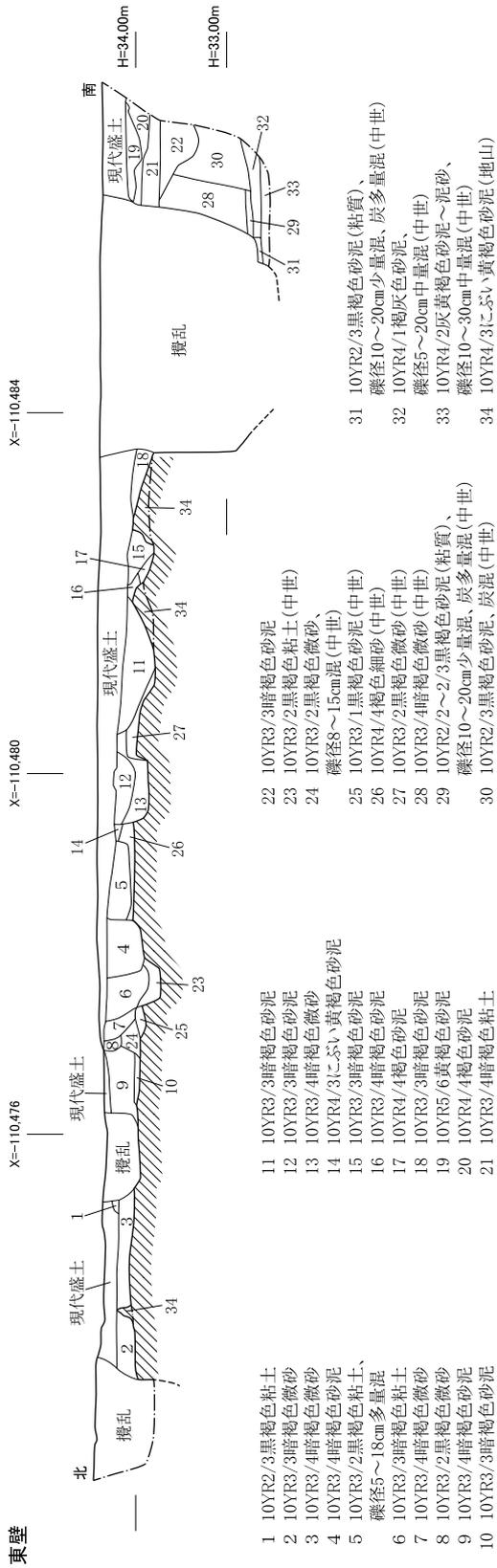
今回検出した最も古い遺構は、平安時代末期に廃絶した方形木組井戸（井戸119）である。調査区北部の中央で検出しており、井戸の木枠内埋土から多量の土師器と鹿角が出土している。

中世（鎌倉・室町時代）の遺構が最も多い。室町時代末期の円形石組井戸（井戸77・80）と鎌倉時代後半の隅丸方形の石組井戸（井戸40）を四条通に面してほぼ3m間隔で東西横並びに検出した。これは町屋に伴う遺構群である。また、調査区南東隅で室町時代末の地下室（地下室109）を検出した。この地下室には火災により焼けた土壁が炭化木材とともに多量に落ち込んでおり、上屋として土壁づくりの建物が覆っていたことが想定できる。石組井戸群の北側では室町時代後半期の方形や円形の浅い土坑群を多数検出している。さらに各所で約径0.3mの柱穴を多く検出したが、調査区全域にわたり後世の攪乱が多いため建物として復元できなかった。また、調査区北壁に沿って近世以降の井戸群が掘られているが、それよりやや南で江戸時代初頭に埋まったと考える格段に浅い井戸19を検出している。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代末期	井戸119	
鎌倉時代	土坑114、井戸40	井戸40は室町に降る可能性もある
室町時代	井戸77・80、地下室109、土坑21・49・50・88・90～93・98	
江戸時代初頭	井戸19、土坑9・54・83・97	

東壁



南壁

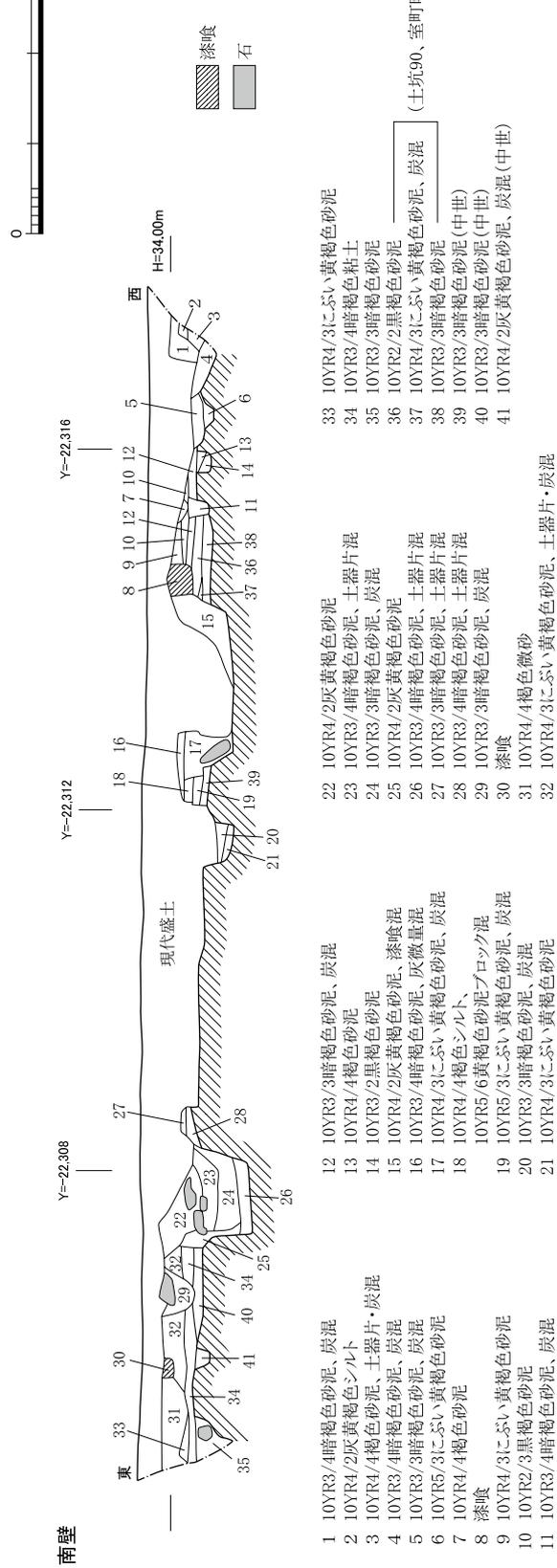


図5 調査区東壁・南壁断面図 (1 : 80)



図6 遺構平面図 (1:100)

(3) 遺構

平安時代末期

井戸119 (図7、図版2) 四条大路北築地心推定ラインより北に12m、西洞院大路東築地心推定ラインより東に24.5m地点が井戸心となる正方位の方形木組井戸である。掘形は一辺約2mを測るが、東部は上部が攪乱され失われていた。木枠は腐食が激しく、痕跡のみ留めており、その痕跡から一辺約1mの縦板組であることが判明した。深さは検出面から約1.5mである。木枠内から12世紀末の土師器皿が多量に出土し、この頃に破棄されたと考えられる。土師器皿は完形が多い。また、木枠内北東隅から長さ約0.25mの鹿の角を検出している。木枠内底にはにぶい黄褐色微砂が厚く堆積していたが、底部に曲物などの痕跡は検出していない。また、掘形の埋土からは11世紀代の土師器が出土しているので、11世紀代以降に造られ、12世紀末には廃絶された井戸である。

鎌倉時代から室町時代

土坑114 (図8) 調査区南半中央で検出した。周囲が攪乱されており、遺構規模は明らかでない。北側に肩部が残存しており、深さ0.2mである。埋土から鎌倉時代の土師器が出土した。

井戸40 (図8、図版2) 隅丸方形石組井戸である。調査区南部で検出した。南西部と南端部を近代の井戸2基によって破壊されていた。井戸の底には、高さ約0.5mの方形木枠を設置した痕跡が認められた。石組が崩壊する恐れがあったので、上部の石組だけを図化した。深さは約2m、底面の標高は31.4mであった。石組内埋土から鎌倉時代後半(京都Ⅶ期古段階)の土師器が少量出土している。しかし、後述の地下室109に東辺を接して掘られており、北辺のラインも一致する。地下室109は室町時代末に埋没した遺構であり、これと一体に造られたのであれば、室町時代に下る可能性もある。

井戸80 (図8、図版3) 円形石組井戸である。調査区南部西寄りで検出した。掘形径約1.8m、石組内法径約0.9mを測るが、西側は現代まで機能していた石組井戸で破壊されていた。深さは1.7mである。底に高さ約0.5mの曲物を設置した痕跡を認めた。出土遺物から15世紀末に埋まったものとする。

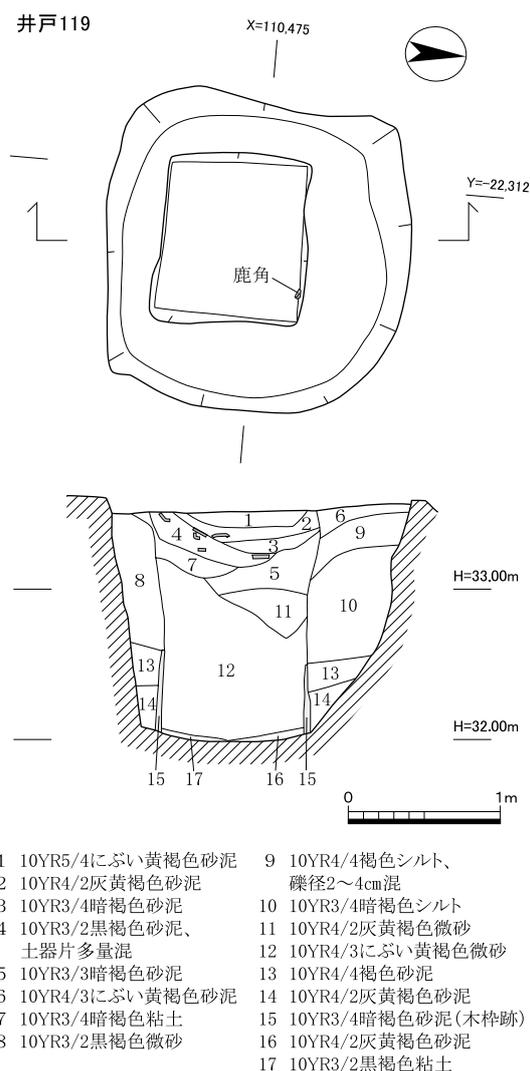
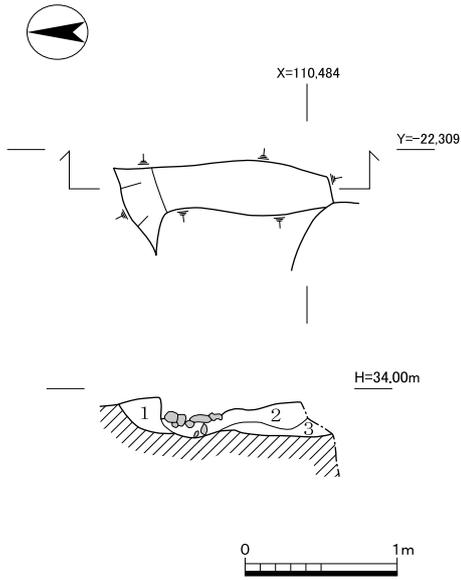


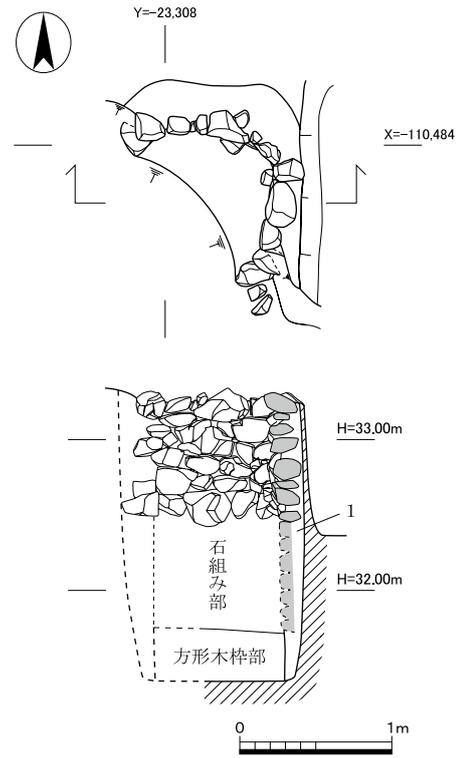
図7 井戸119実測図(1:50)

土坑114



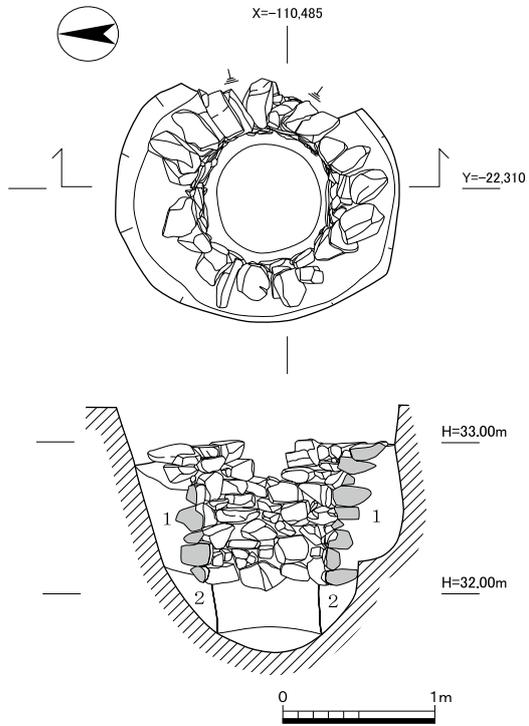
- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 2 2.5YR3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥

井戸40



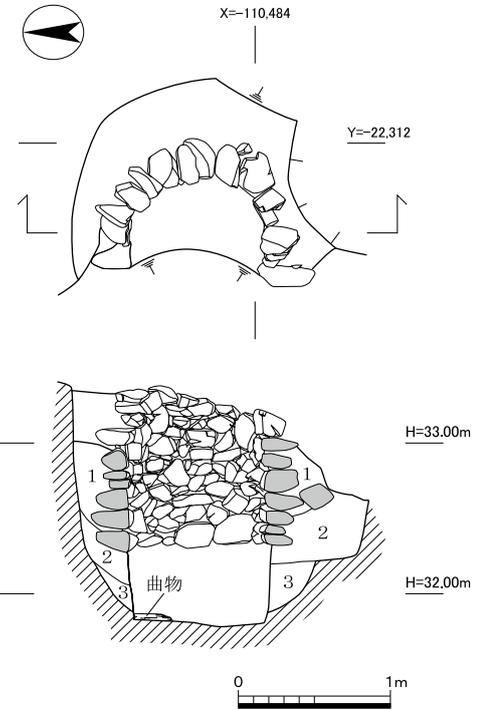
- 1 10YR3/2黒褐色砂泥

井戸77



- 1 10YR3/3暗褐色砂礫
- 2 10YR3/1黒褐色砂礫

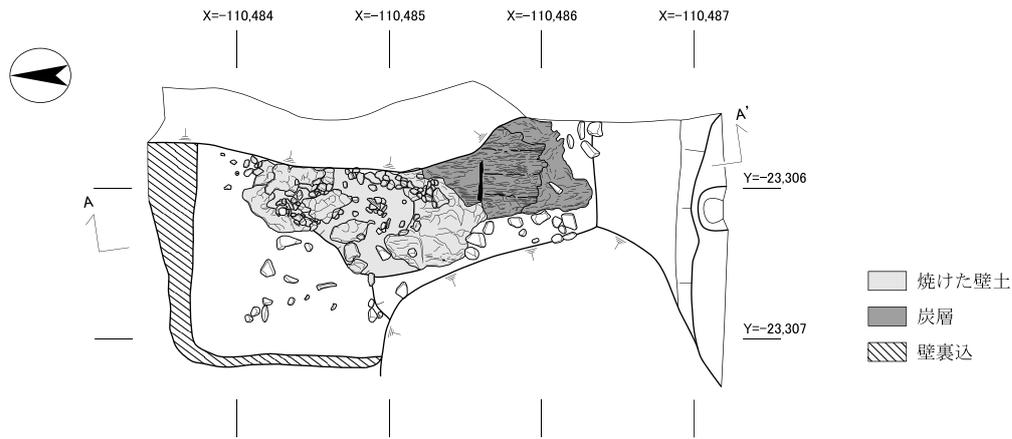
井戸80



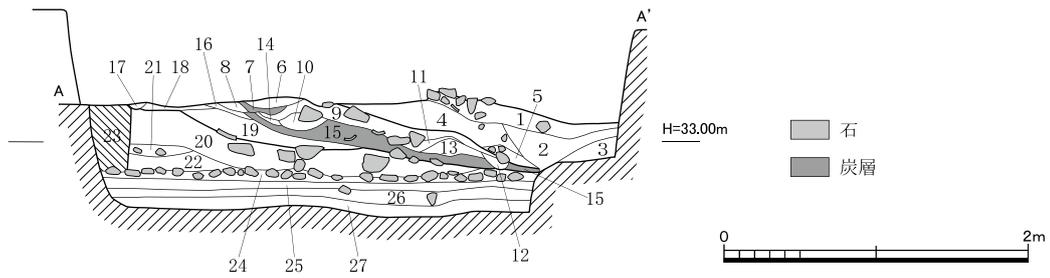
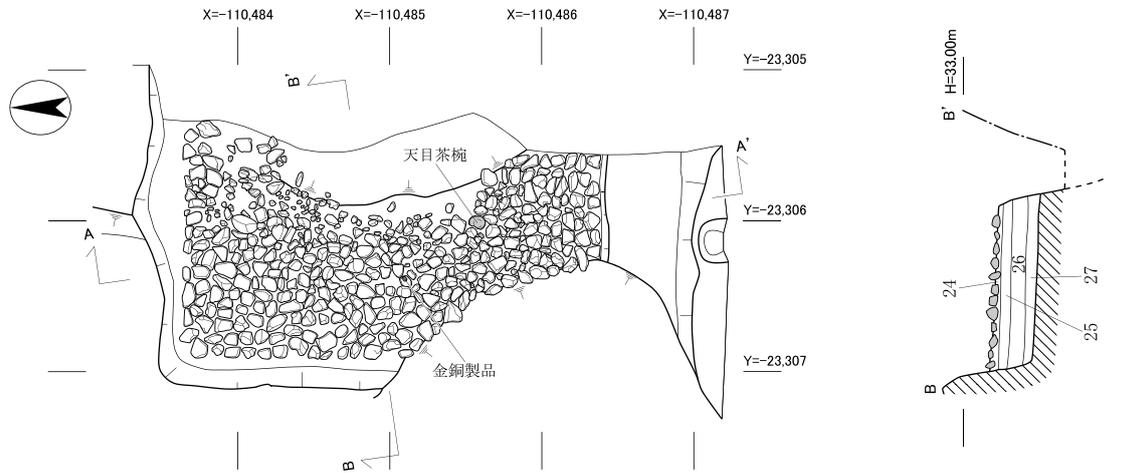
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫、礫径3~10cm混
- 2 10YR4/4褐色細砂
- 3 10YR3/4暗褐色砂礫

図8 土坑114、井戸40・77・80実測図 (1:50)

焼けた壁土・板検出状況



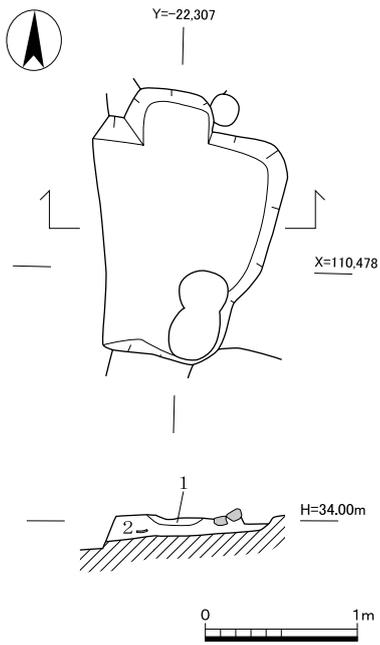
石敷検出状況



- | | | |
|-------------------------------------|---------------------------------|-----|
| 1 10YR3/2黒褐色砂泥、粗砂・炭混 | 15 10YR1.7/1黒色(炭層) | |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫、7.5YR4/3褐色砂泥ブロック混 | 16 5YR4/6赤褐色(焼土) | 第3層 |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫、礫径5cm混 | 17 10YR4/4褐色(焼土) | |
| 4 10YR3/1黒褐色砂泥、炭混 | 18 10YR5/4黄褐色砂泥、炭・土器片混 | |
| 5 10YR4/2灰黄褐色砂礫 | 19 10YR3/3暗褐色砂泥、粗砂・炭混 | 第4層 |
| 6 10YR4/4褐色砂泥シルト、炭少量混 | 20 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径10~20cm・炭混 | |
| 7 10YR1.7/1黒色(炭層)、10YR4/4褐色シルト混 | 21 10YR3/4暗褐色砂泥 | 壁裏込 |
| 8 7.5YR3/2黒褐色(焼土) | 22 10YR4/2灰黄褐色砂泥 | |
| 9 10YR4/6褐色砂泥、炭少量混 | 23 10YR3/2黒褐色砂泥 | |
| 10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 | 24 10YR2/3黒褐色砂泥、礫径5~15cm混(石敷) | 地業層 |
| 11 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、炭多量混 | 25 10YR4/4褐色砂泥、粗砂混 | |
| 12 10YR5/6黄褐色砂泥、炭少量混 | 26 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、粗砂混 | |
| 13 10YR4/4褐色砂泥、炭少量混 | 27 10YR4/4褐色・10YR4/6褐色粗砂 | |
| 14 7.5YR4/4褐色(焼土) | | |

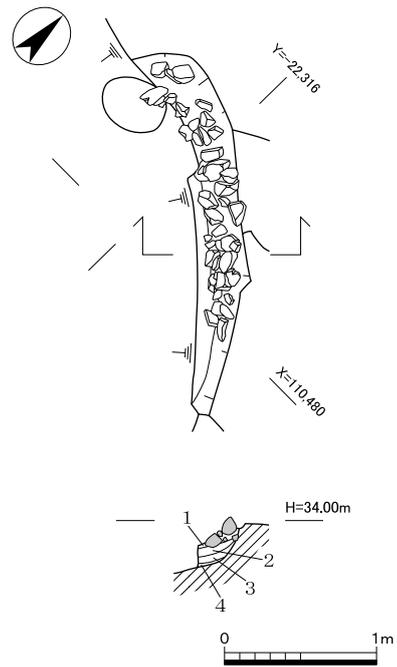
図9 地下室109実測図(1:50)

土坑21



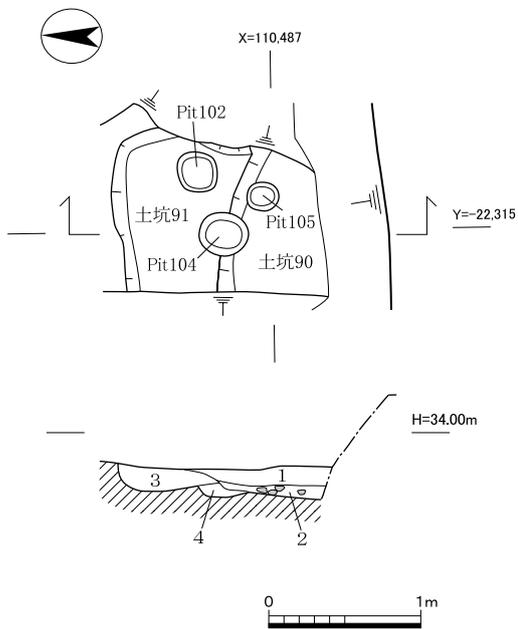
- 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭・土師器混
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、粗砂・炭・土師器混

土坑88



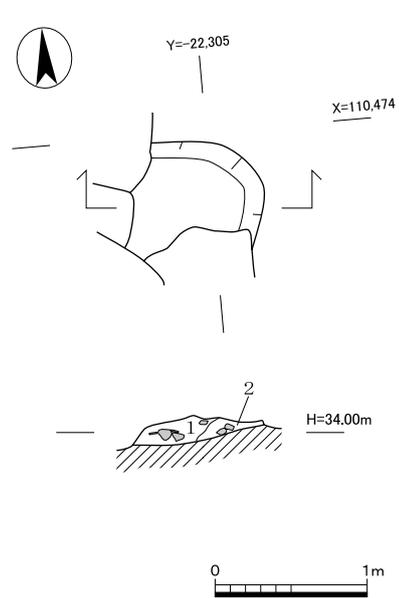
- 1 10YR3/2黒褐色砂泥
- 2 10YR4/4褐色砂泥
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥
- 4 10YR5/4こぶい、黄褐色砂泥

土坑90・91



- 1 10YR3/2黒褐色砂泥 (土坑90)
- 2 10YR3/4暗褐色砂泥 (土坑90)
- 3 10YR4/4褐色砂泥 (土坑91)
- 4 10YR4/3こぶい、黄褐色砂泥 (Pit104)

土坑98



- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、土師器・炭混
- 2 2.5Y4/2暗褐色砂泥、土師器・炭混

図10 土坑21・88・90・91・98実測図 (1:50)

井戸77(図8、図版3) 調査区南部中央で検出した円形石組井戸である。深さは1.5mであるが、上部は削平され失われた状態であり、特に西側の破壊が著しい。石組内から猪の上腕骨が出土し、底で高さ約0.3mの曲物跡を検出した。出土遺物から室町時代後半に埋まったものと考えられる。

地下室109(図9、図版4) 調査区の南東部、井戸40に接して検出した地下室である。平面形は方形で正方位に向いていたと推測されるが、東半と南西部を後世の遺構に破壊されているため、全容は明らかでない。遺構の掘形の規模は南北3.5m、東西2.0m以上、検出面からの深さ1.3mを測る。室の南辺に接して掘形の底部を幅0.5m、高さ0.3mの帯状に掘り残した部分があり、その高さに合わせて底部を整地土で嵩上げし、さらに、その表面には拳大の礫を敷き詰めて、平らに整えている。室の北壁には黒褐色砂泥層が垂直に立ち上がっているが、室の内面側には縦板の痕跡が残ることから、この土層は室の周囲に巡らされた縦板壁の裏込め土にあたるものと考えられる。

一方、室の埋土は大きく4層に分かれる。第4層は室が廃絶した後に堆積した土層である。第3層は焼土や炭などを含む土層で、室が火災を受けた際の堆積層である。第2層は褐色や黄褐色を主体とした粘土質の土層で表面が焼けているものもあり、室の南壁を形成した土が、火災によって内側に倒壊したものであると考えられる。第1層は南壁の裏込め土が倒壊した土層であろう。こうした状況から、室はいったん廃絶し、その後比較的短時間のうちに火災を受け、倒壊したものと考えられよう。室の埋没(被災)年代は15世紀後半から16世紀初頭であるとみられる。

なお、壁に残る縦板の痕跡や倒壊した壁に残る炭化材の分析結果からヒノキ材あることがわかっており、室の四周は厚いヒノキ板で覆われていたものと考えられる。

土坑98(図10) 調査区北東部で検出した土坑である。攪乱によって南部と西部は削平されている。主に暗オリーブ褐色泥砂が堆積していた。時代は室町時代である。

土坑21(図10) 調査区北東部で検出した方形土坑である。西側が攪乱によって削平されている。南北幅は1.5m、深さは0.2mである。主に暗灰黄色砂泥が堆積する。時代は室町時代である。

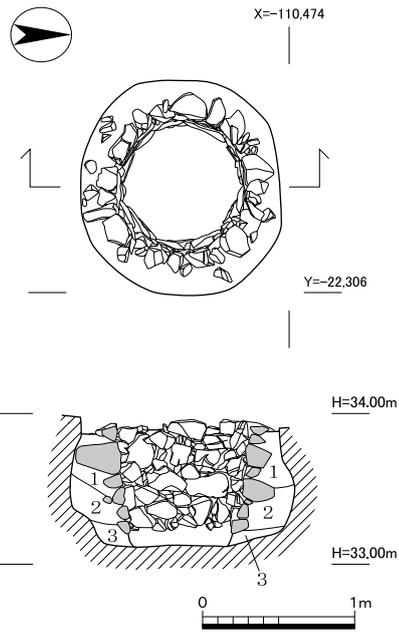
土坑90・91(図10) 調査区南西部で検出した土坑である。2つの土坑が重複している。深さ0.2mの土坑90が黒褐色と暗褐色砂泥で、深さ0.15mの土坑91がにぶい黄褐色砂泥である。時代は室町時代であるが、遺構の性格は不明である。その下で浅い室町時代のPit102・104・105を検出している。

土坑88(図10) 西壁中央付近で検出した石詰め土坑である。大半が失われ、弧状に残存している土坑肩部には2段の石を組んであるが、性格などは明らかではなく、暗渠の可能性もある。遺構の重複関係から室町時代とした。出土遺物は埴塙1片である。

江戸時代初頭

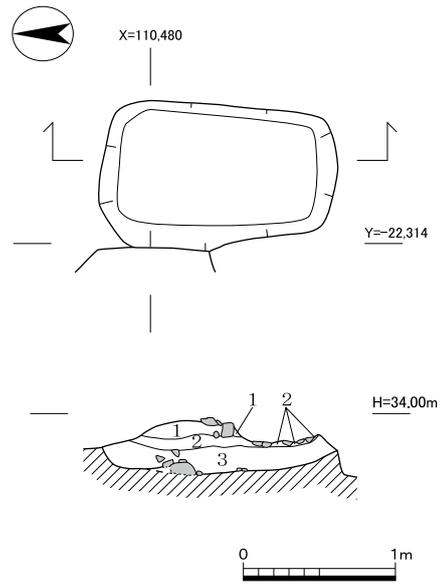
井戸19(図11、図版3) 円形石組井戸である。掘形径約1.5m、石組内法径約0.8mである。深さは0.9mで極端に浅い。石組底から掘形最底部までの深さが約0.1mで、底に曲物の痕跡を検出していない。出土土師器の年代から江戸時代初頭に埋まったと考えられる。ここでは井戸としたが図12・表3に示したように、他の井戸より極端に底面の標高が高い。この時期に一時期滞水層が極端に浅くなったか、もしくは便所または収納施設である可能性も残る。位置的に屋外の奥にあるとすれば

井戸19



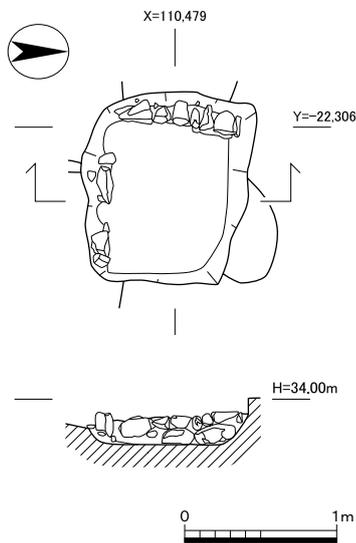
- 1 10YR3/3暗褐色砂泥、炭微量混
- 2 10YR4/3こぶい黄褐色砂泥、粗砂混
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂礫

土坑54

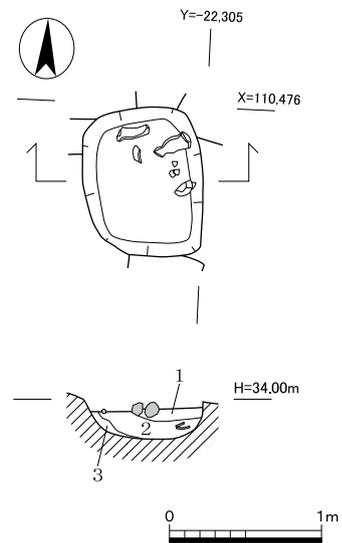


- 1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、黄色粘土・土師器・炭混
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土、炭多量混
- 3 2.5Y4/2暗灰色砂泥、粗砂混

土坑9



土坑83



- 1 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥(やや粘質)
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥

図11 井戸19、土坑9・54・83実測図(1:50)

表3 井戸比較一覧表

遺構番号	時代	上場レベル	底レベル	掘形直径	底幅
井戸119	平安時代	33.62m	32.00m	1.96m	0.94m
井戸40	鎌倉時代	33.34m	31.40m	1.19m	0.85m
井戸80	室町時代	33.40m	31.83m	1.96m	0.88m
井戸77	室町時代	33.25m	31.60m	1.86m	0.69m
井戸19	江戸時代初頭	33.99m	33.12m	1.30m	0.63m

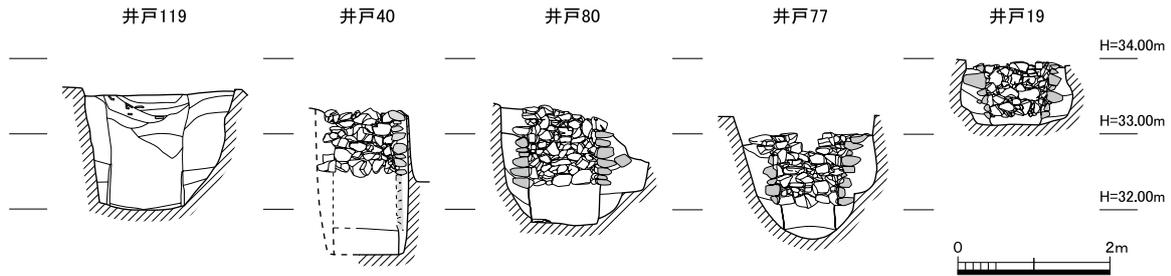


図12 井戸標高比較図（1：100）

共同井戸・共同便所の可能性もあるが、不明である。

土坑54（図11） 調査区西部中央で検出した長辺1.5m、短辺1m、深さ0.3mの長方形土坑である。上層で多くの遺物を検出した。下層は主に暗灰色砂泥が堆積する。時代は江戸時代初頭であるが、遺構の性格は不明である。

土坑83（図11） 調査区北東部で検出した長辺1m、短辺0.8m、深さ0.3mの方形土坑である。主に暗オリーブ褐色砂泥が堆積していた。時代は江戸時代初頭である。

土坑9（図11） 土坑9は調査区東中央部で検出した。長辺1.3m、短辺1m、深さ0.3mの方形石組土坑である。内側に面を作って2段組の石組であるが、北と東は石組がない。遺物が乏しく、遺構の重複関係から室町時代末から江戸時代初頭にかけてであろうと想定している。遺構の性格も不明であるが、方形石組土坑類を江戸時代中期のトイレとする見解がある²⁾。

註

- 1) 平安京遷都に伴って整備された西洞院川は西南方向に流れる小規模な複数の自然河川を直線的につないで南北方向の条坊街区路面に直線でつないだ可能性がある。横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店 1994年参照。
- 2) 内田好昭「発掘資料から見た京都における中世後期から近世の町屋」『平安京における住居形態と住宅建築の学際研究』研究代表者西山良平・平成15年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書 2005年。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

残存状況のよい土師器を中心にした遺物が27箱出土している。また、地下室109に落ち込んでいた焼けた壁土もある。四町南東の調査4で多量に出土した中世の銅の鑄造関係遺物は比較的少量で破片に留まる。また、平安時代末の井戸119井戸枠内から鹿角と、15世紀後半の井戸77の石組内から猪上腕骨が出土している。室町時代後半の遺物が大半を占めるが、弥生時代後期の土器が1点出土している。以下、遺構ごとに遺物の概要を記す。¹⁾

(2) 土器類

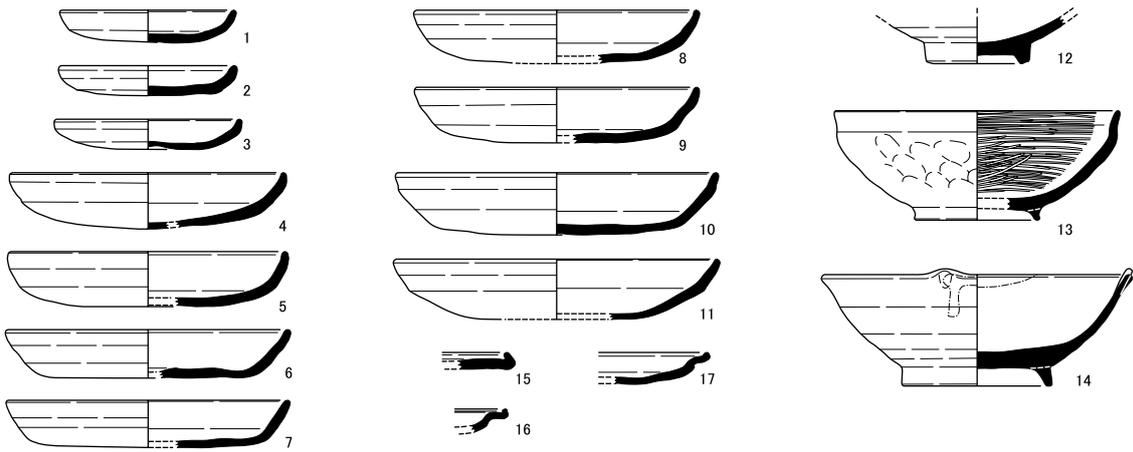
井戸119出土土器（図13、図版5） 1～14は井戸枠内から出土した。1～11は土師器皿である。1～3は小型で口径9.0～9.6cmを測る。4～9は口径14.3～14.8cmである。10・11は口径それぞれ16.8cm、16.9cmである。口縁部は2段ナデの影響で立ち上がり、端部を丸く収める。時期は平安時代末の12世紀半ばから後半（京都V期中段階から新段階）に位置付けられる。12は輸入白磁碗の底部である。内面の釉はやや灰緑色を呈し、細かい貫入が入る。高台は削り出して形成している。時期は平安時代末である。13は瓦器碗で口径13.8cm、器高5.9cmである。器表面は荒れている。後円部はやや内湾し、端部をやや外反させる。胴部が張り出し、底部には逆三角形の高台を貼り付けている。端部を丸く収め端部内面に凹線が廻らない。産地は不明である。14はやや大型の山茶碗で口径16.0cm、器高6.2cmを測る。体部はロクロ形成で底部に回転糸切の痕跡がある。内面見込に

表4 遺物概要表

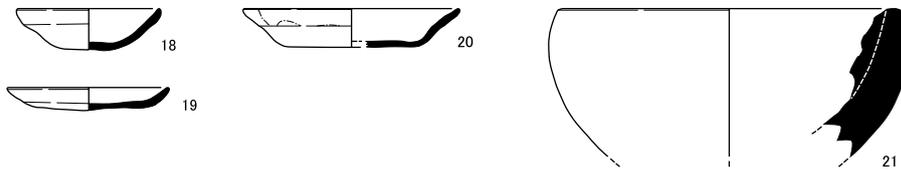
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器1点		
平安時代後期	土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦、鹿の骨		土師器17点、瓦器1点、灰釉陶器1点、輸入陶磁器1点		
鎌倉時代	土師器、埴塼		土師器3点、埴塼1点		
室町時代	土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器、埴塼、石製品、金属製品、銭貨、壁土、鋳型		土師器26点、瓦器3点、施釉陶器4点、輸入陶磁器2点、埴塼2点、石製品4点、金属製品4点、銭貨5点、壁土2点、鋳型1点		
近世初頭	土師器、焼締陶器、埴塼、軒平瓦		土師器7点、焼締陶器1点、埴塼1点、軒平瓦1点		
合計		32箱	85点（5箱）	0箱	27箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

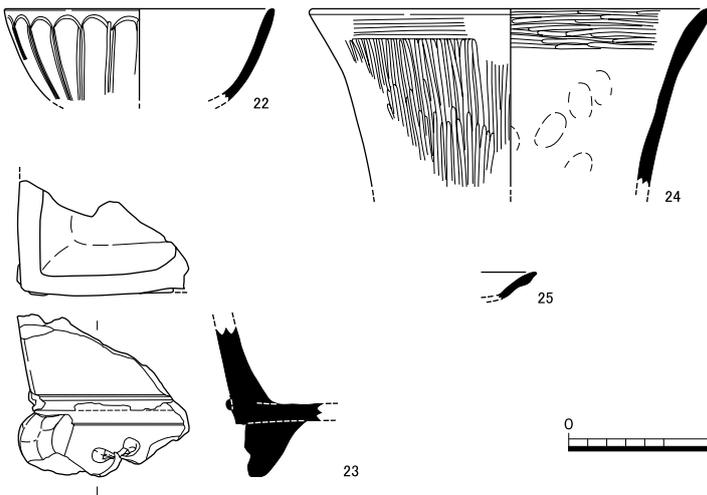
井戸119



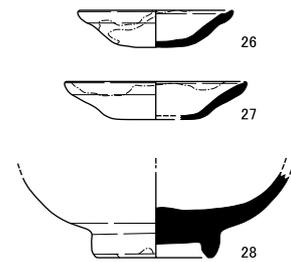
井戸40



井戸77



井戸80



井戸19

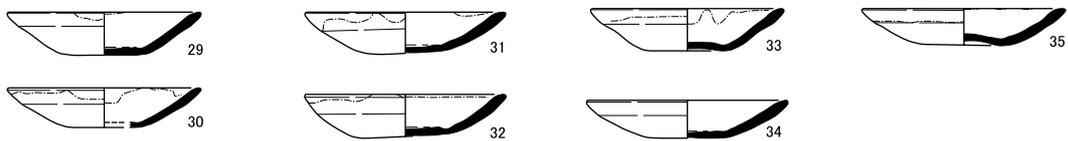


図13 井戸119・40・77・80・19出土土器実測図（1：4）

重ね焼きの痕跡が付き、内面体部にかすかに斑点状の自然釉が付着しているが、口縁に塗ったような釉が一部分に付着している。高台は外側に延びる逆三角形の背の高い貼り付け高台である。端部に輪花として表現するため、外側から器具を押し当てて凹ませている箇所がある。12世紀代のものである。

15～17は井戸掘形から出土した土師器皿である。破片であるため口径などは不明であるが、15・

16は厚手の「て字状」口縁部で、17は明褐色のコースター形皿である。時期は11世紀代（京都Ⅳ期）である。

井戸40出土土器（図13、図版5） 18～20は土師器皿である。18は口径7.4cm、19は口径8.5cm、20は口径11.2cmである。時期は鎌倉時代後半（京都Ⅶ期古段階）である。21は椀形の埴塀片である。口径は7.9cmである。内面に銅滓・緑青が厚く付着している。

井戸77出土土器（図13、図版5） 22は輸入青磁椀である。外面胴部に線刻の蓮弁を廻らす。時期は室町時代である。23は方形奈良火鉢である。底部角に獣足状の足をつけヘラで面取りと装飾を施す。表面に炭素を付着させる。24は瓦器の鉢か花瓶口縁部である。口縁内面と外面に横方向に密なミガキを施し、外面口縁部下には縦方向の細かい磨きを施す。表面に炭素が付着する。25は土師器皿で復元口径6.9cmである。時期は室町時代後半（京都Ⅸ期）である。

井戸80出土土器（図13、図版5） 26～28は石組内から出土した。26・27は土師器皿である。26は口径8.0cm、27は口径9.4cmである。口縁を外反させ端部をつまみ上げている。口縁部に煤が付着する。時期は15世紀末（京都Ⅸ期新段階）である。28は輸入青磁椀である。胎土は粗く、灰白色であるが、削り出し高台で畳付に内外に面取りを施す。高台内面表面は褐色が買った橙色に変化している。釉は乳白色化した薄緑で、高台畳付部まで掛かる。

井戸19出土土器（図13、図版5） 29～35は土師器皿である。口径は9.9～10.5cmで、端部内面に面がある。時期は江戸時代初頭（京都Ⅺ期）である。

地下室109出土土器（図14、図版5・6） 36～47は土師器皿である。36～40はヘソ皿で口径6.3～7.6cm。41～44は小型で口径6.7～7.7cm。立ち上がり部を薄く凹ませて圏線状に作る。45は小型よりやや大きい中型で口径8.8cm。46は大型で口径12.6cmを測る。47は口径5.7cm、器高1.7cm。胴部が垂直に立ち上がり端部に注ぎ口を作る。時期は15世紀後半から16世紀初頭（京都Ⅸ期中段階からⅩ期古段階）である。48は炭層直上から出土したミニチュアの天目茶椀もしくは平椀。口径5.0cm、器高2.2cmである。ロクロ作りで底は回転糸切の平底で口縁部外面に括れ部を廻らす。胎土は精良な須恵器状で褐釉を内面と外面口縁部に掛けている。産地は瀬戸美濃である。49は石敷直上から出土した天目茶椀である。口径11.8cm、器高6.9cmである。後円部は立ち上がり、天目茶椀特有の口縁部の括れはあるが目立たない。胎土はやや黄味掛かった淡灰色でやや粗い。カンナで腰外面と高台脇を削り、高台下面は内反りで浅く削り凹ます。釉は褐色の錆釉を塗った上に黒褐色で光沢のある褐釉を掛けており、いわゆる二重掛けである。産地は瀬戸美濃であろう。内反高台から1500年前後の大窯1期後半に降る可能性もある。50は第2層から出土した高台のない平底瀬戸折縁小皿である。口径8.6cm。器高は2.2cmである。ロクロ形成で底部に回転糸切り痕を有す。釉は淡いオリーブ色で内面全体と外面体部に掛ける。器表が荒れており2次焼成の痕跡がある。後円部を外反させ端部を三角状に作る。器形が当時の土師器小皿に類似している点が興味深い。高台が付くものは大窯時代に降る製品に多いが平底は類例が少ない。51は炭層直上から出土した古瀬戸の灰釉筒形容器である。口径10.1cm、器高10.0cmを測り、筒状の体部にラッパ状の口縁を開く。筒部と口縁部の境外面に1条の沈線を廻らす。花瓶かもしくは仏具の類と考えられるが類例が少ない。ロ

地下室109

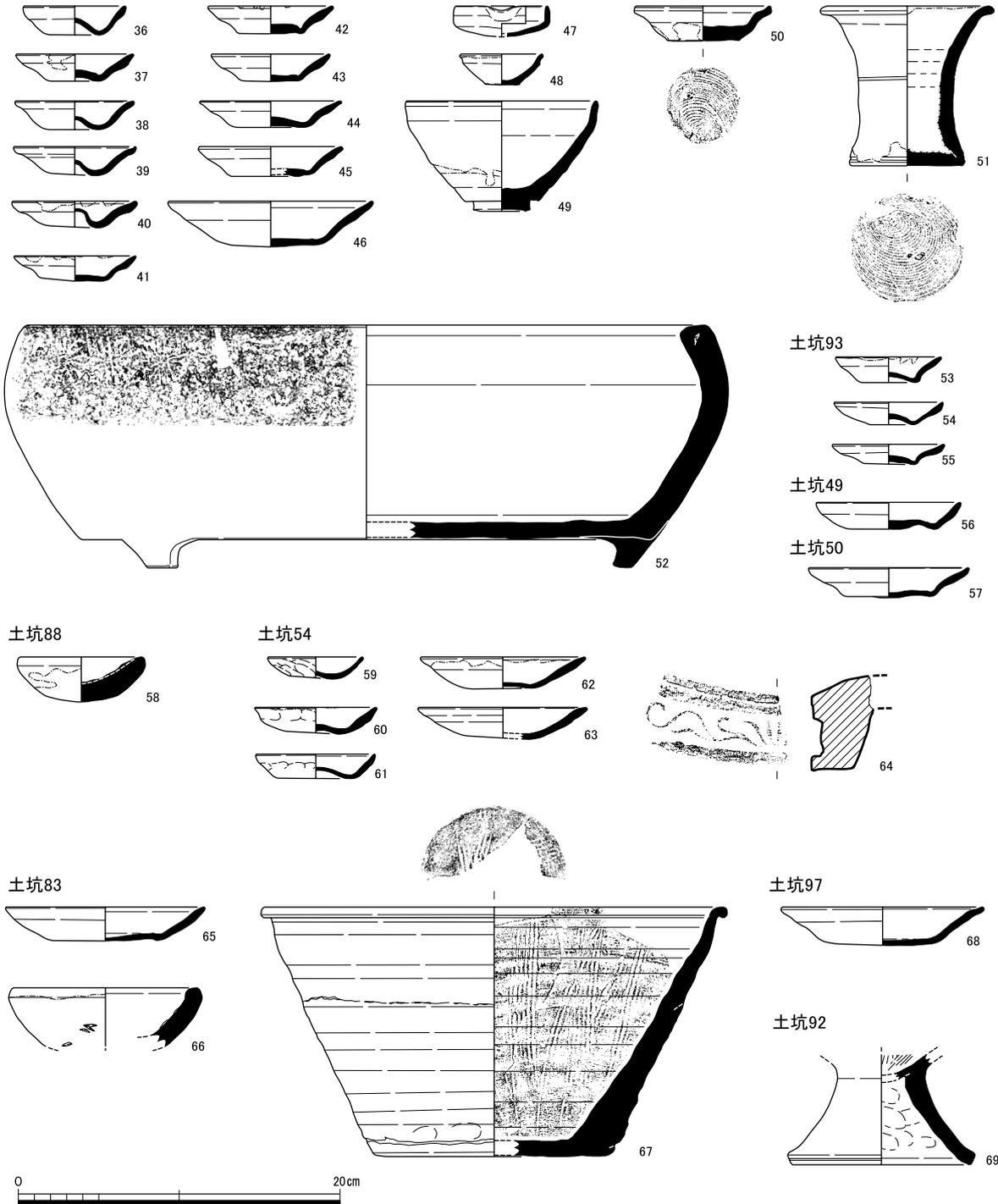


図14 地下室109、土坑93ほか出土土器・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）

クロ形成で底部に回転糸切り痕が残る。釉は体部外面全体と端部内面に少し掛ける。釉の色調は淡いオリーブ色である。52は炭層直上で出土した円形奈良火鉢である。胴部が外に張り、端部上面はほぼ平らにする。幅42.0cm、器高15.2cmを測る。軟質で器表が荒れているが表面に炭素が吸着している。足をナデで装着している。外面底には離れ砂が付着する。胴部上面に菊花文を廻らす。時代は15世紀代である。

土坑93出土土器（図14） 53～55は土師器皿である。口径6.5～6.9cmを測る。時期は室町時代

後半（京都Ⅸ期）に比定できる。

土坑49出土土器（図14） 56は土師器皿である。口径8.8cmを測る。時期は室町時代後半（京都Ⅸ期）である。

土坑50出土土器（図14） 57は土師器皿である。口径9.9cmを測る。時期は室町時代後半（京都Ⅸ期）である。

土坑88出土土器（図14） 58は小型埴塼である。口径7.6cm、器高2.8cmである。胎土は灰色で粗く、長石が多く混入する。胎土内に籾殻の痕跡が窺われる。内面は銅滓が付着し、緑青がみられる。

土坑54出土土器（図14） 59～63は土師器皿である。59は小型で口径5.9cmの粗雑な作りである。中型の60・61はそれぞれ口径7.3cm・7.5cmで中世の土師器皿の影響を保っている。大型の62・63はそれぞれ口径10.1cm・10.4cmである。時期は江戸時代初頭（京都Ⅺ期）である。

土坑83出土土器（図14、図版6） 65は土師器皿で口径12.3cm。端部内面に面を作る。時期は江戸時代初頭（京都Ⅺ期古段階）である。66は埴塼で口径11.4cm。内面に鉄滓・緑青が付着する。粗い胎土中に長石・籾殻痕が残る。67は信楽産の焼締陶器播鉢である。胴部が直線的であり開かない。口径28.6cm、器高15.0cmである。胎土は密で長石が混じり明褐赤色である。内面体部に6条の間隔幅の播り目を施している。内面見込にも播り目を入れる。内面下半部は播り込まれ磨滅によって表面が滑らかである。口縁部は外に丸め込んで外反させている。胴部と口縁部の内面境に沈線を廻らす。

土坑97出土土器（図14） 68は土師器皿である。口径12.4cmを測る。口縁内面に面があり、端部を少しつまみ上げる。時期は江戸時代初頭（京都Ⅹ期）である。

弥生土器（図14、図版6） 69は弥生時代後期の高台付甕または鉢である。高台は末広がりのでコの字状の端部とする。高台径は11.0cm、残存高さは6.9cmである。胎土は精良で長石や雲母を含み、にぶい橙色で一部に黒斑が残る。体部は失われているが底部剥離部にカキヤブリを入れて接合を強化している。中世の土坑92から出土しており混入品である。

（3）瓦 類（図14）

64は土坑54から出土した軒平瓦である。瓦当幅4.6cmを測る。縦に長い段顎である。平瓦部上面はナデ消しで成形痕はうかがえない。瓦当上部に幅2cmの面取りを施す。瓦当周縁部の上部が下部に比べて厚く、中央横方向に浅い段差線がある。この段差を範ズレ・範端によるものか、瓦当形成技法の痕跡であるのかは不明である。断面にみられる段差線から発生する接合痕からすれば、瓦当貼り付け式瓦である可能性が高い。瓦当模様部に離れ砂もしくは雲母を撒いた痕跡がある。模様は唐草文。中心飾り部中央部で割れているが、陽刻の棒状蓮華文が上に放射状に開く。室町時代末から江戸時代初頭の意匠である。江戸時代の『山城名勝志』収録の「安養寺縁起」に「永禄五年（1562）下知云々、四条西洞院安養寺」とあり、後の天正年中に秀吉によって四条坊門南京極に移転させられた安養寺の存在が知れる。この瓦は、その寺に葺かれていたものの可能性もある。

(4) 石製品 (図15、図版6)

70・71は土坑109から出土した石製品である。70は撥状の細かくて硬い灰色の砂岩系の砥石である。欠落部を除いてすべての面に研いだ跡が残り、表面が平滑である。

71は角が滑らかな70gの軽石であるが、上面と側面に面がある。用途は不明である。いずれも炭化層上から出土した。

72は井戸77石組内から出土した葉や茎・果実(桃か)を陽刻に彫った方形板状の石製品である。残存部は隅部で裏面は剥離している。粒子が細かく黒色の粘板岩系で、表面はよく磨かれて滑らかである。材質と形態からみて硯とみられ、果実部が墨を擦る陸部の可能性がある。

73は井戸80石組内最下層から出土した厚さ約2cmの板状三角形の完形硯である。上面は丁寧に磨き平滑である。裏面は粗い磨きと鑿の痕跡がそのまま残る。側面は自然石状態のままにして風流に仕上げている。

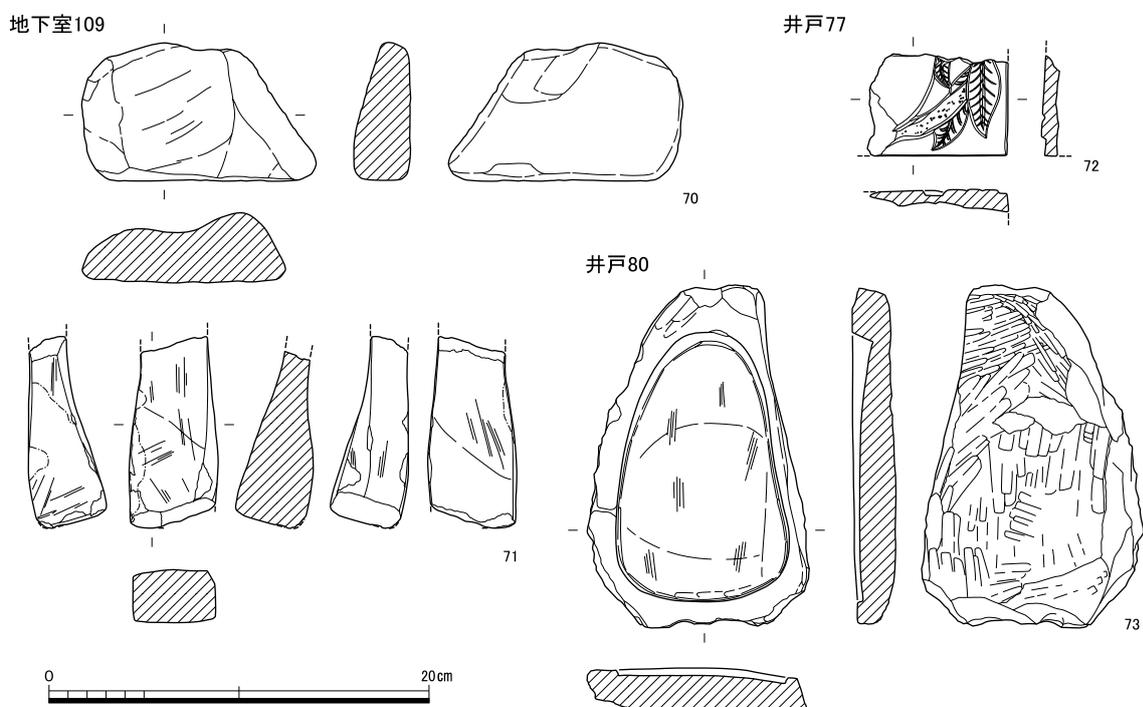


図15 石製品実測図 (1 : 4)

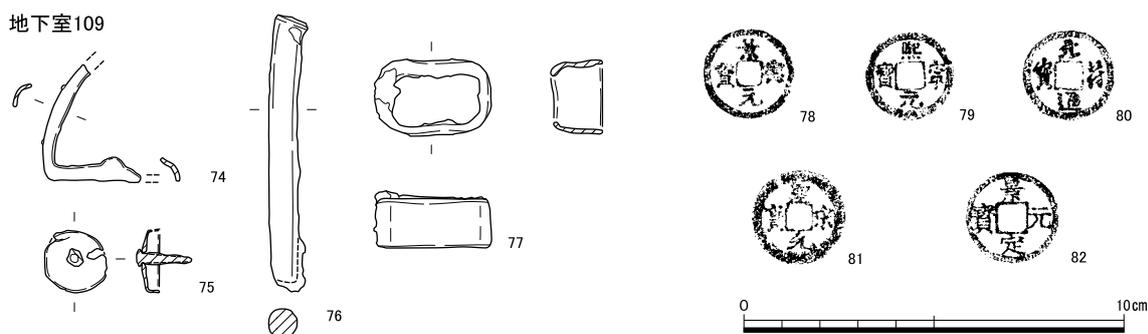


図16 金属製品実測図・銭貨拓影 (1 : 2)

(5) 金属製品 (図16、図版6)

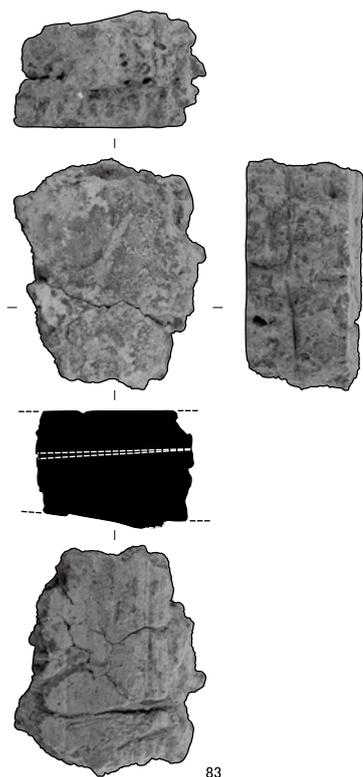
74～77は地下室109から出土した銅製品である。74は「L」字状で丸みを帯びた板状銅金具で、地下室北東部埋土上部から出土した。径0.6cmのピンが付いた円形の鋌と考えられる銅金具75と、長さ7.3cm、径1cmの棒状の銅金具76は炭化層上面から、輪状で隅丸方形の金銅製金具77は石敷き層直上から出土した。いずれも用途不明品である。

78～82は地下室109から出土した渡来銭である景德元寶（1004年初鑄）・熙寧元寶（1068年初鑄）・元符通寶（1098年初鑄）・聖宋元寶（1101年初鑄）・景定元寶（1260年初鑄）である。残存状態は不良である。

(6) 壁土・鋳型 (図17)

83・84は地下室109から多量に出土した焼けた壁土の一部である。壁土は生焼けから赤く焼け締まったものまであり、材質は不明であるが木舞跡が片面に残る厚さ約3cmの荒壁部と、厚さ約2

地下室109

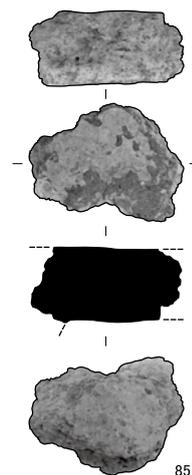


83



84

土坑90



85



図17 壁土・鋳型実測図 (1:3)

cmの中壁部からなる2重の塗りで、漆喰などの上塗り部の痕跡はうかがえない。木舞跡は竹のような節や湾曲のある材ではなく細かく割った木材か網代である可能性がある。また、木舞痕の逆側である荒壁表と中壁裏には一方方向の長いスサなどが並べられた痕跡を認め、その箇所ではほとんどの個体が剥離していた。スサなどをツナギに用いていた可能性がある。中壁表はコテなどで平坦にしている。赤く変色しているものもあるが煤などで黒色化しているものが多い。荒壁部の胎土は粗く切スサの痕跡と考えられる空間が多く脆いのに対し、中壁部の胎土は空間が所々にみられるものの概して密で残りも良い²⁾。

85は土坑90から出土した厚さ3cmの板状鋳型破片である。鏡の粗型に類似する。粗い灰橙色の胎土に靱殻痕と長石・チャート・雲母を含む。熱による変色の可能性があるが、鋳面となる片面にはやや細かい灰色の厚さ0.01cmの土が塗られ、さらにその表面が白色化している。模様ががないので真土の剥離面の可能性もある。

註

- 1) 出土した土師器の編年は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年に準じる。なお、「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～ⅩⅣ期」を「京都Ⅰ～ⅩⅣ期」で統一した。その他の土器類に関しては『概説・中世土器・陶磁器』（中世土器研究会 真陽社 1995年）などを参照した。

750頃			840頃			930頃			1010頃			1080～90頃			1180頃			1270頃			1360頃			1440頃			1500頃			1580～90頃			1660頃			1740年代頃			1820年代頃											
Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ			Ⅴ			Ⅵ			Ⅶ			Ⅷ			Ⅸ			Ⅹ			Ⅺ			Ⅻ			Ⅼ			Ⅽ											
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 2) 壁の用語については、『日本の壁』（INAX 1985年）収録の諸論考による。特に山田幸一の「壁と左官技術」では日本最古の法隆寺金堂壁が「檜の小割材を蔓または藁縄で編んで木舞をつくり、それに今日でいう荒壁・中壁・ふるい土の順に土壁を塗り、最後に白土上塗り」とされている。今回出土した中壁の表面に篩土が塗られている可能性を否定できないが、コテで平らにした圧力のため中壁と上塗りの篩土との差を明白に確認することはできなかった。また「木舞材料に竹が使われはじめるのは、はるか後の鎌倉時代からである」とある。これに関して前掲フロイス『日本史』の「革ノ棚という一区」にあった「小屋」の壁の表現に「<屋根を>藁で葺いてあったが、内部は戸外とあまり変わらないほど雨が降った。周囲は壁ではなく細い芦で囲われ、以前に一度塗ってあった土はもう剥げ落ちてしまっていた」（前掲書）とあり、芦でできた網代の木舞に壁土を塗ったものと考えられる。今回の出土の荒壁と中塗りの間にある長いスサ状の痕跡がこうした状態を表現している可能性がある。

5. まとめ

平安時代の遺構について

今回の調査で確認できた平安時代の遺構は、井戸1基（井戸119）のみであった。この井戸は12世紀末に廃絶されたものである。したがって藤原氏邸宅で里内裏でもあった「四条宮」に伴うものではなく、安元3年（1177）の京都大火で焼亡した右大臣源雅定の亭が存在した時期に該当するものである。源雅定亭がどのような宅地構成であったかは明らかではなく、わずかではあるがその解明の手掛かりになるものと思われる。

中世の町屋遺構について

中世の遺構としては、四条大路に面して一定の距離に東西方向に並ぶ石組井戸などを検出した。これらの井戸は、ほぼ3mおきに東西に並ぶことから、室町時代には狭隘な間口の町屋が四条通に面して少なくとも3軒は並んでいたことが指摘できる。この井戸列の部分は町屋の台所に該当する可能性が高く、京町屋特有の「うなぎの寝床」と呼ばれる敷地を形成していたものと考えられる。こうした状況は近世から近代まで続いていたことが、南北に細長く掘られた攪乱坑や溝の配置からなどから見て取れる。図18は、これら井戸の位置から近世の町屋の間口を復元した模式図である。中世の井戸の脇には近世の井戸が重複して掘られており、近現代に至るまで敷地割の変動は少ないと考えられる。ただ、調査区南東部で検出した地下室（地下室109）は、間口の推定ラインを越えて存在しており、いくらかの変遷はあったものと考えられる。

一方、調査区の北東部では室町時代の重複する多くの方形土坑群を検出した。これらの土坑群は地山が粘土質である部分に分布しており、底部が礫層直上で止められていることから採土坑であるとみられる。しかし、江戸時代後半以降の信楽焼の便槽甕群が東西に並ぶ地帯と重複しており、出土遺物が少なく埋土も類似した暗い鶯色を呈する土層であることから、町屋の奥に位置する便所群の可能性もある。いずれにせよ、通りに面した町屋裏手の土地利用の状況を示した遺構群である。

地下室について

調査区南東隅で検出した地下室109から、壁土がまとまって出土している。これらの土壁は表裏に面をなすもので、地上に存在した建物にかかわるものと考えられ、地下室と上屋建物とがセットになっ

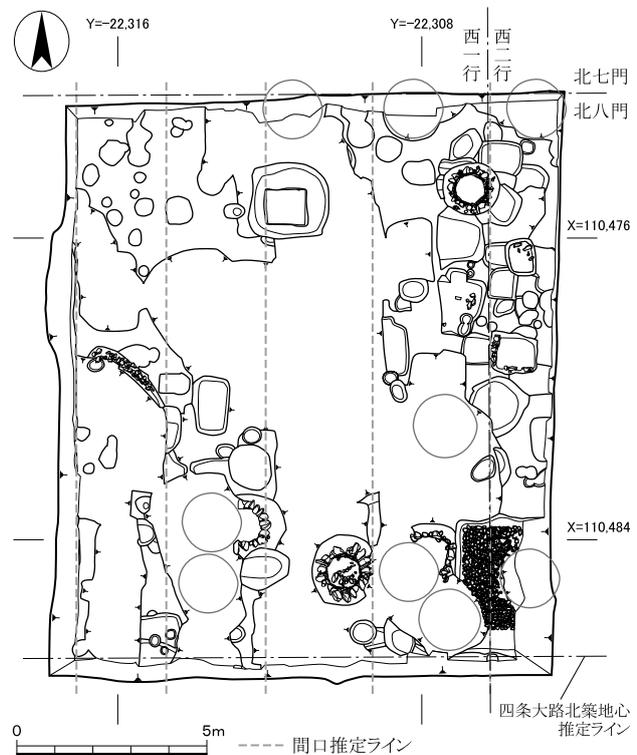


図18 町屋間口復元模式図（1：200）

た構造の構築物が想定できる。こうした例は中世の「三条町」の調査例にみられる¹⁾。三条町に調査においても、室の内部に赤く変色した粘土層や構造材と考える炭化した材木に絡んで多量に落ち込んでおり、今回の例と同じく火災によって上屋家屋の部材が地下室に落ち込んだものと考えられる。こうした建物は、間口の狭隘な敷地を有効に利用した工夫のたまものといえよう。

一方、地下室の床構造については、今回のものと同じく、拳大の礫を敷き詰める例が三条町にもある。三条町では他にも束石を据え付けている例や板敷の痕跡を示す例もある。また、壁面の造作では縦板の裏込めに石を詰め込むものと詰め込まないものなどの違いも認められる。こうした床や壁構造の違いは、地下水位や使用形態の違いによるものと考えられるが現状では判然としない。近世の町屋に伴う地下室については、関西地域では多くが石組の石室であるが、江戸では船大工系大工が地下水の侵入しにくい檜造の穴倉を造っていたことが、今日までの研究で判明している²⁾。今回の発見は、こうした問題点に取り組むうえで貴重な資料となろう。

地形と遺構の関係について

中・近世の遺構検出面は西の西洞院川に向かって下降している。調査区の西壁沿いでは西側にさらに一段下がる傾向が見て取れる。検出した遺構も西に向かって遺構の密度が逡減しており、調査区の西側端には井戸の分布が認められない。こうした状況は西洞院川沿いが土地利用のしにくい地区であったことを示すものと考えられる。おそらく中・近世を通じて繁栄した四条町の外れとして、やや寂れた在り方を反映しているのであろう。これは、前掲の脚注で触れたフロイスの『日本史』にある「町外れの、通常きわめて下層のもっとも賤しい人たちが住んでいる革ノ棚という一区」の描写をほうふつとさせ、興味深い。

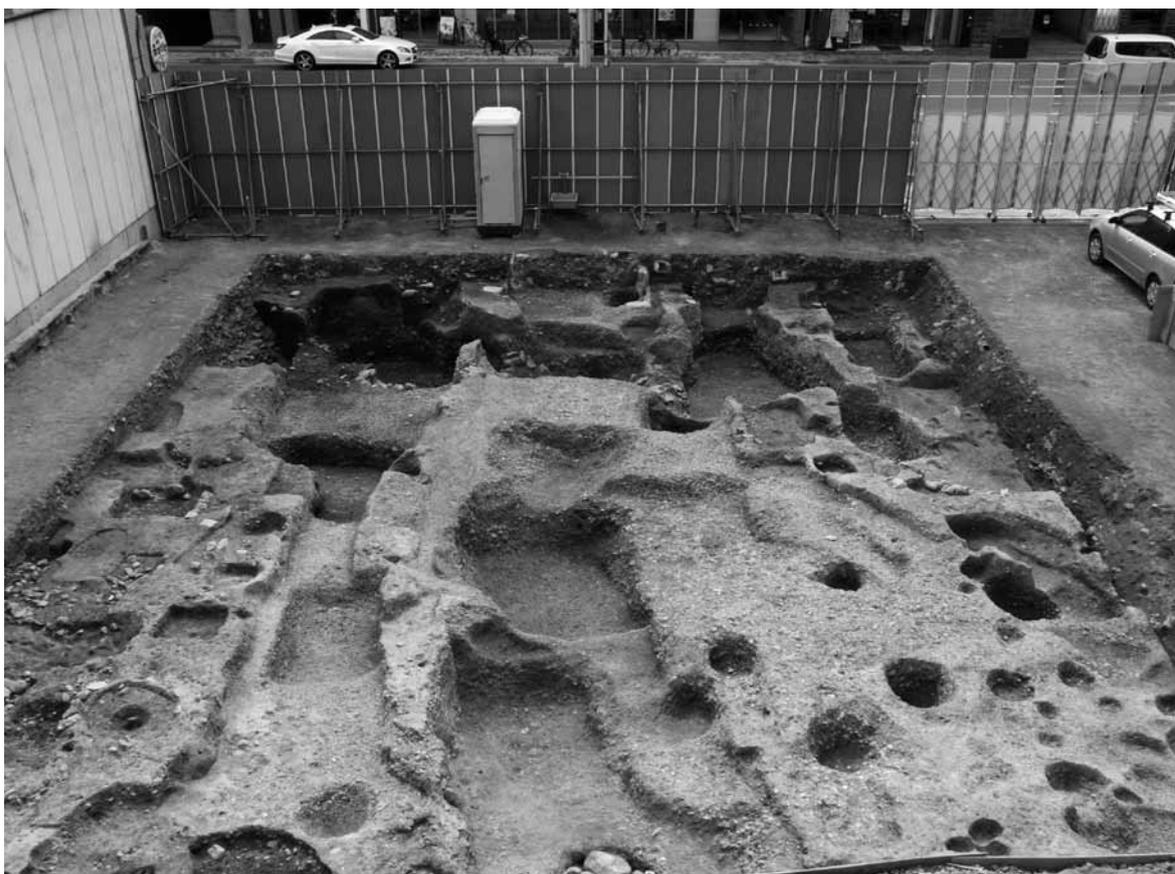
註

- 1) 『平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年。

なお、三枝暁子氏によれば『北野天満宮史料・古記録』「三年一請引付」関連史料に「西京酒屋・白壁」という表現があり、「白壁」が（土倉）を意味したとする興味深い指摘がある（『比叡山と室町幕府』東京大学出版 2011年、p 119参照）。今回調査で検出した壁土には漆喰は認められなかったが、地下室とセットになった塗り壁のある建築物の存在は、土倉や酒屋との関連を考慮する必要があるのではないだろうか。

- 2) 江戸の地下室については、古泉弘『江戸の穴』柏書房 1990年、小沢詠美子『災害都市江戸と地下室』吉川弘文堂 1998年などの文献を参考とした。

圖 版



1 江戸時代全景（北から）



2 平安時代末期から室町時代全景（北から）



1 井戸119 (東から)



2 井戸119半裁状況 (東から)



3 井戸119鹿角出土状況 (南から)



4 井戸40 (南西から)



1 井戸77 (北西から)



2 井戸77猪骨出土状況 (北から)



3 井戸80 (西から)



4 井戸19 (東から)



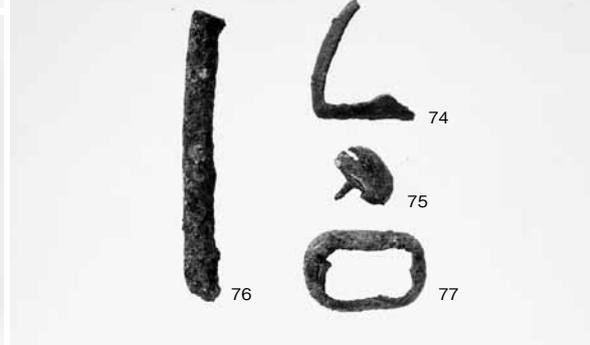
1 地下室109炭層検出状況（南から）



2 地下室109石敷検出状況（南から）



井戸119・40・77・80・19・地下室109出土土器



地下室109・土坑83・92出土土器、石製品、金属製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうさんぼうよんちょうあと・からすまあやのこうじいせき							
書名	平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-15							
編著者名	東 洋一							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年5月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区	26100	1	35度 00分 14秒	135度 45分 20秒	2015年10月 14日～2015 年12月3日	195㎡	マンション 建設工事
からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡	かつきよやまちょう 郭巨山町11他		712					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	弥生時代		弥生土器				
烏丸綾小路遺跡	集落跡	平安時代末期	井戸	土師器、須恵器、瓦器、 灰釉陶器、輸入陶磁器、 瓦、鹿の骨				
		鎌倉時代	土坑、井戸	土師器、埴塼				
		室町時代	井戸、地下室、土坑	土師器、瓦器、施釉陶器、 輸入陶磁器、埴塼、 石製品、金属製品、銭貨、 壁土、鋳型				
		江戸時代初頭	井戸、土坑	土師器、焼締陶器、埴塼、 軒平瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-15

平安京左京四条三坊四町跡・
烏丸綾小路遺跡

発行日 2016年5月27日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961